HYOGO ひょうご Network

この人ひと

「人」を診る医師に

長尾クリニック院長 長尾和宏さん ㊤

4月18日、尼崎市のアルカイックホール・オクトで「尼崎生と死を考える市民フォーラム」が開かれた。在宅医療の普及を進めるため、長尾和宏が一昨年から企画しているイベントだ。

3回目を迎えた今年のテーマは「がんになっても慌てない、諦めない」。長尾は会場を埋めた約650人の市民や介護者、医療関係者を前に訴えた。

「みんながんになったら慌てるし、諦める。しかし、そうではない。いざとなって慌てないために、普段からがんに対する知識を養うとともに、生と死についてもっと考え、死生観を持つことが大切だ」

長尾には総合医療のプロとしての信念がある。

「病」だけではなく、「人」を診る―。

14年前に尼崎市で開業したクリニックでは、外来診療のほか、医師や看護師、ケアマネジャー、理学療法士らによる在宅医療チームを編成し、がんの看取りや訪問リハビリなど24時間年中無休で高度な在宅医療を提供してきた。

長尾は香川県で生まれ、小学校から高校までは伊丹市で過ごした。最初は教師を志したが、父親の死をきっかけに「人を診る医師になりたい」と志望を変えた。大学受験に一度は失敗。自動車メーカーの生産ラインや日雇いの土木作業現場で働いたこともあったが、一念発起して再び大学を目指した。

東京医大時代はサークル活動で、「社医研」と呼ばれる無医地区研究会に入った。休みを利用して年間延べ約1カ月半、高齢者ばかりが残された長野県の山村の公民館で合宿。毎日何軒かずつ家庭訪問し、お年寄りの血圧を測り、健康教育を行った。この体験が往診を中心とした在宅医療に取り組む長尾の活動の原点となった。

卒業後は大阪の救急病院で、研修医として修業を積んだ。最初の半年は外科を担当し、連日、手術室に入った。「先輩医師の後を〝金魚のふん〟のように回り、体力の続く限り、医師の仕事を覚えた」と長尾。1人で当直していた夜、「組長が撃たれた。よろしく頼む」と暴力団組員から電話がかかり、緊張して救急車を待ったこともある。

1年半の内科医研修では、重篤な肝臓病患者と日々格闘した。末期の肝硬変で吐血し、ベッドサイドは血だらけ。毎日のように患者の壮絶な最期に立ち会った。

「こうなる前に何か打つ手はなかったのか」

このときの強烈な体験が、長尾を「苦しまない最期の医療」と「在宅で自然で尊厳ある最期をサポートする医療」を実現する道に駆り立てることになる。

その後、長尾は人生の大きな転機となる出来事に遭遇する。

平成7年1月17日、阪神大震災が関西を襲った。

（敬称略）

病気だけではなく、人間を診る―。患者の立場に立った医療を心掛ける長尾さんの診察時の表情は穏やかだ＝尼崎市昭和通

ながお・かずひろ　昭和33年6月30日、香川県善通寺市生まれ。同59年、東京医大卒。大阪大学第二内科入局後、市立芦屋病院内科勤務を経て、平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。17年に「阪神ホームホスピスを考える会」「ケアマドの会―医師とケアマネージャーの連携の会―」「尼崎生と死を考える市民フォーラム」などを設立。医学博士、尼崎医師会勤務医・地域医療連携委員会委員長。51歳。